

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：32678

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K15193

研究課題名（和文）オーラルヒストリーを用いた建築設計教育におけるテンデンツァ運動の影響の研究

研究課題名（英文）The Study of Influence of Tendenza Movement in Architectural Design Education through Oral History

研究代表者

片桐 悠自（KATAGIRI, Yuji）

東京都市大学・建築都市デザイン学部・講師

研究者番号：20801343

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アルド・ロッシが主導したとされる建築運動テンデンツァの理論的萌芽に肉薄するものである。1960年代初頭から「テンデンツァ」が国際的な認知を受ける前の1973年以前の期間を対象として、ジャンウーゴ・ポレゼットとロッシ、マンフレッド・タフーリとロッシの關係に着目している。ロッシの初期作品の幾何学的な建築表象がポレゼットとの1960年代の協働關係の上で形作られ、その後のテンデンツァ運動の表象へとつながったことを論じた。1966年以降の『都市の建築』出版以後、タフーリとロッシの理論的な共有を明確化し、ミラノ工科大学でのロッシの建築設計教育におけるイデオロギー的文脈の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、近年研究が進んでいるテンデンツァ運動について、アルド・ロッシ、ジャンウーゴ・ポレゼット、マンフレッド・タフーリを対象として、理論的側面と建築表象の關係を追いながら、運動の理論的萌芽の一端を解明した。「テンデンツァ運動」は、「アルド・ロッシとその弟子たちの運動」とされることが多いが、ポレゼットやタフーリといった同世代の建築家との理論的交流とともに成立したことを明らかにした。また、ロッシの協働者であった堀口豊太氏（SDA Japan）や、ポレゼットに師事し、その作品論を博士論文として執筆した間瀬正彦氏へのインタビューを通して、テンデンツァ運動の国外への影響を部分的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study approaches theoretical beginning of Tendenza, which is treated as the architectural movement led by Aldo Rossi. It focused on the relationship Rossi and Gianugo Polesello, and that between Rossi and Manfredo Tafuri.

1) In the architects adolescence, Polesello and Rossi established their design with simple geometry in the early 1960's and characterized its architectural representation before the beginnings of the movement Tendenza.

2) It is clarified that the common architectural ideology between Rossi and Tafuri in the end of 1960s affected Rossi's educational theory for architectural design in Politecnico di Milano.

研究分野：建築理論

キーワード：建築理論 建築運動 建築設計教育 テンデンツァ アルド・ロッシ ジャンウーゴ・ポレゼット マンフレッド・タフーリ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

建築家アルド・ロッシ(Aldo Rossi 1931-1997)が主導したとされる建築運動「テンデンツァ Tendenza」は、2012年のポンピドゥー・センターでの回顧展以降、注目を集めてきた。本運動は、フランスの五月革命以後の建築教育改革、スイス連邦工科大学・チューリッヒ校での教育や「ティチーノ派」の結成など、各国に広範な理論的影響を及ぼしてきたとされるが、その核となる思想について、史的に追った研究は発展途上であるといえる。例えば、Aureli(2007)(2008)は、ロッシの理論バックグラウンドとしての戦後イタリアのマルクス主義的文脈を扱い、設計者としての現代的なアクチュアリティをもって、建築理論の読み直しを図っている。また、Andreola(2015)はミラノ工科大学教授としてのロッシと、彼の助手であったジョルジョ・グラッシの建築教育を扱っている。さらに、ロッシの前半生の活動については Lampariello(2017)が未公刊資料を含めた悉皆的な調査を行っており、「作家アルド・ロッシ」に関する研究として欠かせない研究となっている。

一方で、ロッシの作家研究が各国で進められていると同時に、「テンデンツァ」運動の建築表象ならびに理論的基盤には、ほとんど触れられてないのが現状である。本研究課題は、テンデンツァ運動の実態を、建築理論と表象の関係から肉薄することで、運動の建築設計教育における現代的意義を問い直すことを開始当初の目標としていた。

## 2. 研究の目的

1973年の第15回ミラノトリエンナーレ「合理的な建築 Architettura Razionale」における「テンデンツァ」運動成立以前の、ロッシの協働者には、ほとんど注目されてこなかった。実際、ロッシの建築設計事務所として知られる SDA(Studio di Architettura)は、内田繁ならびに堀口豊太を中心とする日本事務所 SDA Japan など、各国に現地事務所を持っていた。しかしながら、1960年代初頭の SDA 設立当初は、ロッシ以外に2名の共同パートナーがおり、共同で制作を行っていた。また堀口氏へのインタビューで明らかになったように、ロッシ自身は、建築設計における協働の重要性を理解しており、彼の作風の変遷は、協働者との関係抜きには語り得ないと考えた。そこで、運動が成立したとされる時期に着目し、ロッシの協働者と、ロッシ自身が説明する「テンデンツァ(傾向)」概念に着目することで、テンデンツァ運動の実態に肉薄することを研究の目的としていた。

## 3. 研究の方法

本研究課題は、以下の3つの方法を併用しながら、進めた。

- (1) オーラルヒストリーによる同時代人からの聞き取り・資料収集
- (2) 一次資料の収集と資料翻訳・読解
- (3) 図面資料に基づく対照建築の3Dモデル化ならびにレンダリング作成

2019年7月に学会発表を兼ねたセルビア、イタリアへの調査、9月にフランスへの調査を行い、資料収集を行った。2020年3月以降のCOVID-19の蔓延によって、(1)の方法は、当初の予定よりも遥かに困難になったため、(2)(3)の方法に重点を置き、研究成果として発表した。共同研究先・研究協力者との連携に伴って、同時代の建築における幾何学表象と都市的なスケールとの関係にフォーカスする知見が得られた。

## 4. 研究成果

本研究を特徴づける研究成果の1つとして、SDAの筆頭パートナーが、ジャンウーゴ・ポレゼット(Gianugo Polesello 1930-2007)という建築家であり、初期のロッシの設計活動において、重要な寄与をなした人物であることが判明した。ロッシとポレゼットは1964年頃、袂を分かったものの、「トリノのチェントロディレツィオナーレ」(1962)や「クネオの対独パルチザン記念碑」(1962)といった作品で、ポレゼットの寄与は無視できないものであり、少ない要素を用いた幾何学による設計思想は、哲学者マッシモ・カッチャーリによって、「最大の清貧さ[la massima povertà]」として称賛された(Cacciari 1992)。単純な幾何学図形の要素はロッシも用いるものであるが、ポレゼットは、ロッシよりもさらに「合理主義者」的なアプローチを推し進めた建築教育を行っていた(Aureli and Tattara 2021)。両者はジョルジョ・デ・キリコの絵画、レーモン・ルーセルの詩的手法、ウィトゲンシュタインの明晰さなどを共有していたが、1964年頃、ロッシが台座を用いた円柱を設計に適用したことで決別する。以後も、ポレゼットは、「モールス信号のように」意味内容をもたないような幾何学形態を用いて設計活動を行っており、ロッシ以上に厳格な「テンデンツァー合理主義的」という建築表象を実現したといえよう。

(片桐悠自「ジャンウーゴ・ポレゼットの設計思想とアルド・ロッシとの“円柱論争” - 「ポレゼット-ロッシ」の青春時代の協働とテンデンツァ運動への理論的寄与 -」, 『日本建築学会計画系

論文集』(777), 2437-2445, 2020年11月も参照)

またマンフレッド・タフーリ(Manfredo Tafuri 1935-1994)との理論的共有が、1965-1971のミラノ工科大学でのロッシの建築教育と関係づけられることを論じた。両者は「階級建築(解放された社会のための建築)は存在しない」という立場を1960年代後半から共有しており、ロッシの『都市の建築』(1966)、タフーリの『建築のテオリア』第二版序文にそれが現れている。1980年の『球と迷宮』において、タフーリは「ロッシスクール」の党派性に苦言を呈したものの、概ねロッシの作品に好意的であり、テンデンツァの国際的な建築表象の形成に寄与したと推測される。(片桐悠自「タフーリ、人生に抗って アルド・ロッシとマンフレッド・タフーリの思潮的交感」『日本建築学会計画系論文集』(781), 1155-1165, 2021-03を参照)

さらに、ロッシが1971年に設計した「モデナのサンカタルド墓地」(以下「モデナ墓地」と表記)における赤い立方体状の建築物が、ロッシの設計論にとって重要な幾何学的表象をなしていたことを論じた。墓地の設計競技が告示される1971年5月以前の、『青のノート / *quaderni azzurri*』(以下QA+巻号と表記)に記入された立方体形状をもつ建物のヴォリュームと関連づけられることを示した。「モデナ墓地」のエスキースはQA07(1971年5月28日~6月23日)から、QA09(同年8月5日~10月10日)にかけて描かれているが、それ以前のQA04(1970年1月26日~12月30日)の2月12日の記述に「穿たれた立方体 *cubo scabato*」という文字が書き残される。このイメージはさらにQA02(1968年11月26日~1969年12月2日頃)における1969年12月1日のエスキース図とも関連づけられる。立方体シエマへのオブセッションは、モデナ墓地の設計が始まる少なくとも2年以上前から生じており、テンデンツァの合理主義的イメージを代表する「モデナ墓地」が、独立したイメージとして保持され、適用されるに至ったプロセスが示された。

(片桐悠自「穿たれた立方体 - アルド・ロッシ「モデナ墓地」における立方体シエマの設計論的起源 - 」, 『日本建築学会計画系論文集』(781), 1147-1153, 2021-03を参照)

今後の研究方針としては、継続中の研究課題「マンフレッド・タフーリの設計活動ならびに運動史的影響の研究」(21K14337, 研究代表者:片桐悠自)に一部の関連成果を委ねつつ、テンデンツァ運動の理論基盤がどのように後続する建築家に伝播したかを明らかにしていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 KATAGIRI Yuji	4. 巻 85
2. 論文標題 GIANUGO POLESELLO'S ARCHITECTURAL IDEOLOGY AND " COLUMN DEBATE " WITH ALDO ROSSI	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 2437 ~ 2445
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.85.2437	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 KATAGIRI Yuji	4. 巻 86
2. 論文標題 CUBO SCAVATO	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 1147 ~ 1153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.86.1147	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 KATAGIRI Yuji	4. 巻 86
2. 論文標題 TAFURI, CONTRE LA VIE	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 1155 ~ 1165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.86.1155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 片桐 悠自	4. 巻 40
2. 論文標題 アウレーリ、タフーリ、ロッシ、ボレゼッロ 建築理論における「ヴェネツィアン・セオリー」の水脈	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表象文化論学会ニューズレター『REPRE』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片桐 悠自	4. 巻 1746
2. 論文標題 アルド・ロッシの"貧しさ、侘しさ"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 建築雑誌	6. 最初と最後の頁 13-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KATAGIRI Yuji	4. 巻 84
2. 論文標題 WITTGENSTEIN'S IMPACT IN BIRTH OF THE IDEA OF <i>CITT? ANALOGA</i>	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 2219 ~ 2225
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.84.2219	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 KATAGIRI Yuji	4. 巻 84
2. 論文標題 THE DIMENSIONS OF STAIRCASE OF MONUMENTS DESIGNED BY ALDO ROSSI	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 2017 ~ 2023
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.84.2017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 HORIKOSHI Kazuki, KATAGIRI Yuji, IWAOKA Tatsuo	4. 巻 84
2. 論文標題 THE STREET STRUCTURE IN ALFAMA DISTRICT, LISBON	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)	6. 最初と最後の頁 1937 ~ 1946
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3130/aija.84.1937	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 片桐 悠自
2. 発表標題 デ・キリコの望楼：アルド・ロッシの「ムッジオの市庁舎」(1971-72)の設計プロセス
3. 学会等名 日本図学会 2020年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北野祥太、吉浦聡一郎、横山一晃、堀越一希、片桐悠自、岩岡竜夫
2. 発表標題 正三角形平面を用いた建築の内部構成と外的要因の関係(1)
3. 学会等名 2021年度日本建築学会大会（東海）学術講演会
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 吉浦聡一郎、片桐悠自、北野祥太、横山一晃、堀越一希、岩岡竜夫
2. 発表標題 正三角形平面を用いた建築の内部構成と外的要因の関係(2):ジャンウーゴ・ボレゼッロの「ローマの下院議会新庁舎案」(1965-66)
3. 学会等名 2021年度日本建築学会大会（東海）学術講演会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 片桐悠自、吉浦聡一郎、北野祥太、横山一晃、堀越一希、岩岡竜夫
2. 発表標題 正三角形平面を用いた建築の内部構成と外的要因の関係(3):「ローマの下院議会新庁舎案」と「セグラータの噴水」の配置図における北側日影表現についての考察
3. 学会等名 2021年度日本建築学会大会（東海）学術講演会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 片桐 悠自
2. 発表標題 ジャンウーゴ・ポレゼッロとアルド・ロッシの協働および友情に関する覚書
3. 学会等名 2020年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 片桐 悠自
2. 発表標題 量子力学的都市 アルド・ロッシ《科学小劇場》の「重ね合わせ」の理念
3. 学会等名 表象文化論学会 第14回研究発表集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片桐 悠自
2. 発表標題 アルド・ロッシの手記における「岐阜大仏断面図」の模写と類推的意味
3. 学会等名 2019年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 AMEMIYA, Masafumi, SAEKI, Masako, KATAGIRI, Yuji, YOKOO, Shin.
2. 発表標題 GEOMETRICAL REPRESENTATION OF SAME-SCALE ANALYSIS AMONG 4 ARCHITETURES OF IVAN ANTIC
3. 学会等名 The 21 International Congress of Aesthetics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片桐 悠自
2. 発表標題 社会主義都市のシュルレアリスム 建築設計教育におけるアルド・ロッシの 手法( プロセデ)
3. 学会等名 表象文化論学会 第14回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片桐 悠自
2. 発表標題 建築家アルド・ロッシの「ファニャーノ・オローナの小学校」の設計シエマの変容過程
3. 学会等名 2019年度日本図学会春季大会(神戸)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 図研究会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東海教育研究所	5. 総ページ数 112
3. 書名 図5	

〔産業財産権〕

〔その他〕

フランス国鉄SNCFの建築家Loic Pianfetti氏を始めとするフランスの研究者・研究協力者とともに、1970年代以降の国際的な建築・都市の建築文化に関連する共同研究を行っている。この共同研究が、テンデンツァ運動における国際的な影響を扱った本研究課題が後続する研究課題「マンフレッド・タフーリの設計活動ならびに運動史的影響の研究」へと展開する一助となった。

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岩岡 竜夫  (Iwaoka Tatsuo)  (60223369)	東京理科大学・理工学部建築学科・教授    (32660)	
研究協力者	堀越 一希  (Horikoshi Kazuki)  (00907503)	東京理科大学・理工学部建築学科・助教    (32660)	
研究協力者	横尾 真  (Yokoo Shin)	シンガポール国立大学・Department of Architecture・ Visiting Senior Fellow	
研究協力者	大村 高広  (Ohmura Takahiro)	東京理科大学大学院・理工学研究科建築学専攻・博士課程    (32660)	
研究協力者	横山 一晃  (Yokoyama Ikko)	東京理科大学大学院・理工学研究科建築学専攻・博士課程    (32660)	
研究協力者	雨宮 真史  (Amemiya Masafumi)	東京理科大学大学院・理工学研究科建築学専攻・修士課程    (32660)	
研究協力者	佐伯 雅子  (Saeki Masako)	東京理科大学大学院・理工学研究科建築学専攻・修士課程    (32660)	
研究協力者	北野 祥太  (Kitano Shota)	東京理科大学・理工学部建築学科    (32660)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	吉浦 聡一郎  (Yoshiura Souichirou)	東京理科大学・理工学部建築学科  (32660)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	フランス国鉄(SNCF)			